

〔榮花物語あさ緑〕五月〇寛仁五日院〇一條より姫君〇親王の御かたにとて、くすだま奉らせ給へり、

この比をおもひいづればあやめ草なかる、おなじねにやともみよ、御かへし

〔千載和歌集哀傷〕枇杷との、皇太后宮〇藤原妍子三條后わづらひ給ひけるとき所をかへて心みむとて、

ほかにわたり給へりけるを、かくれ給ひて後陽明門院一品親王〇禎と申ける、枇杷とのに

かへり給へりけるに、あるき御ちやうの内に菖蒲くすだまなどのかれたるが侍りけるを

見てよみ侍ける、

あやめ草泪の玉にぬきかへてをりならぬねを猶ぞかけつる

返し

江侍從

玉ぬきしあやめの草はありながらよどのはあれむ物とやは見し

〔徒然草下〕御帳にかゝれるくす玉も、九月九日、菊にとりかへらるゝといへば、さうぶは菊のおり  
までもあるべきにこそ、枇杷皇太后宮〇藤原妍子三條后かくれ給ひてのちぶるき御帳の内にさうぶく  
す玉などのかれたるが侍りけるを見て、をりならぬねをなをぞかけつると辨のめのとのいへ  
る返事に、あやめの草はありながらとも、江の侍從がよみしそかし、

〔看聞日記〕應永二十五年五月四日、早旦菖蒲葺如例、續命縷室町殿足利義持進之付常宗進之若公内

内付女房進之、御返事共御祝著之由奉之藥玉前々遣所共皆賦之

〔簾中舊記〕五月御くすだまの事

一五月五日の御くすだまは、御所さまへは十二すぢづゝのが参り候、上らふたちより御下まで  
は九すぢにて候、御びでうは六すぢづゝにて候、内裏伏見殿こりやう殿より、大なる御くす玉參